

「隣の爺」

飯野文彦

わたしの実家の隣に爺が住んでいる。小汚い爺だった。ひとり暮らしだった。夏でも冬でも、煮染めたようなよれよれの着物（というよりも浴衣に近い）姿だった。

その姿で時折、近所のスーパーに買い物に出る。振り返ったり、冷やかしたり、茶化したりするのには、爺を知らない者だ。地元に住む者は、子供だろうと決して、そんなこととはしない。爺を見かけたら、はやめに避ける。偶然鉢合わせしたら、ぺこりと会釈し、足早に立ち去る。

爺は名前を「砂川以作」といった。名前はみんな知っている。だが、それ以上知っている者はない。できるだけ関わり合いにならないようにしているからだ。否、もう一つ知っていることがある。それは爺が信じられないくらい長生きしていることだった。

正確な年齢は誰も知らない。同じ町内に住む老人に訊いても、

「結婚して自分が越してきたときには、すでに老人で、あの家でひとり暮らしをしていました」

と言う。幼い頃からこの町内に住んでいるという別の老人も、同様のことを言った。

さらに、

「うちの祖父さん祖母さんが、ここに家を構えたとき、すでに砂川さんは老人で、あそこですりどりで暮らしていたと言っていた」

と話した。そんな風だから、わたしが物心ついたとき、当然ながら爺はそこにいた。すでに爺だった。親から口を酸っぱくして言われたものだ。

「砂川さんには、ぜったいに近づかないこと」

わたしは十八才で上京した。そして二十年後、やることなすこと都会ではうまく行かなくなり、都落ちして実家に戻ってきた。親と同居しながら、新たな気持ちで小説を書き、顔見知りの編集者に読んでもらうなり、新人賞に応募するなりして、再起を期するつもりだった。

だが物事はそう簡単にいかない。日がな一日、二階の六畳間にこもっていても、原稿はいっこうに進まない。

焦りもある。近所の目もある。当然苛立ちが募り、ますます原稿は進まなくなった。結果として、といえるかはわからないが、わたしは神経を病んだ。

何かを憎んでいないと、自分が保てない。外部のものを憎んでいないと、憎しみが自分に向かってしまう。そうなると到底生きていけない。と、手近に憎しみを向ける相手

がいた。それが爺だ。

なぜ、あんな得体の知れない人間が存在するのか。そんなことが二十一世紀の現代、許されるのか。

親に訊いても、砂川と切り出ただけで、首と手を左右に振り、

「やめろ。砂川さんのことは気にするな」

と話を打ち切ってしまう。かといって、両親以上に、じっくりと話せる知人は、近所にはいない。

わたしは市役所へ出向いた。受け付けに若い女がいたので話しかけた。

「近所の人のことで、相談がある」

「どんなご相談でしょう？」

「ひとり暮らしをしている老人だが、昔から老人で、今でも老人だ。いったい幾つになるのか、誰も知らない。こんなことがあって、いいのか」

「はあ……」

「はあじゃないだろう。どう思う？」

「そう言われなくても……」

女は口ごもった。近くに立っていた中年の男が、何か？ と近づいてきた。やりとり

を見ていたようである。わたしより数才年上らしいが、頭頂部にまったく毛がない。わたしは女に言ったのと同じことをくりかえした。すると中年のその男は言った。

「もしかして、××町に住む砂川さんのことではないですか？」

「そうだ。知っているのか」

「ええ、まあ。それであなたは？」

「隣に住む井之という者だ。あんな得体の知れない者が、隣に住んでいると考えただけで、おちおち昼寝もできない」

「何か、トラブルでも？」

「存在自体が、トラブルだと言っているんだ」

「しかし、何か問題でも起こしたのならわかりますが……」

「ほんとうに、そう思うのか。それじゃおまえは、あの爺のことをちゃんと把握しているんだな」

「いいえ、自分は係がちがいますから」

「それなら、なぜ勝手なことをほざく」

「ちよつと『ほざく』はないでしょ」

中年男が、眼を細めた。これだとばかり、わたしは責めた。

「なに、善良な市民に楯突くのか。えっ？」

さらに罵倒しようとしたが、中年男はあっさり、すみません、と詫び、

「今、担当の者を連れてきますから」

と逃げるように姿を消した。

苛立ちの矛先が消えたため、ふたたび受け付けの女を見た。女はわたしが見ているのを承知しているくせに、視線を合わせない。

「おい」

わたしが言うと、女は両肩をぴくっと揺らし、わたしを見た。わたしは眉間に皺を寄せ、女を睨んだ。

「何か？」

今にも泣きそうな顔で、女は言った。わたしは視線を逸らさず、見つめたまま答えた。

「父親の弟に生まれた男の子は、わたしから見れば何だ？」

「は？」

「は、じゃない。おい」

今度はどすを効かせたので、女は椅子から飛び上がるほど、身体を揺らした。目も潤み、唇もへの字に閉じる。

「何か？」

今度は警備員が来た。三十前と思える若さだが、超デブで、一見ただけであだ名をつけた。怒ったトラフグ。わたしが睨むと、トラフグは、険しい顔でにらみ返す。

「おまえはやくざか？」

「は？」

「ここで雇われているやくざだな」

「自分は、警備担当の者ですが。あなたは？」

「善良な市民だ。その女に訊けばわかる」

トラフグは受け付けの女を見た。見つめかえす女の目からは、涙がこぼれていた。若い女から、そんな風に見られたことはないのだろう。トラフグは紳士ぶって声をかける。

「だいじょうぶ？」

「ええ」

「この人は？」

「何か聞きに来たらしいんですけど、あたしのこと『おい！』っ脅すんです」

「いい加減なことを言うな」わたしは会話に割って入った。「さっきここにいた禿が、今担当の者を呼びに行っているのを、この女は知っている。そうだろ。エッ」

「でも、だからって『おい』呼ばわりされるなんて。両親からも、そんな風に呼ばれたことないのにい」

「この馬鹿者」

わたしは女に叫んだ。女は立ち上がり、後ずさり、

「ねえ、聞いたでしょ。ひどい」

と両手を顔でおおった。

「ちよつと、あんた。どういうつもりだ？」

トラフグがわたしに詰め寄った。頬やあごのふくれ具合に反して、目は糸蚯蚓のように細い。

「きさま、やくざの本性を出したな」

「やくざも何も、彼女を『馬鹿』呼ばわりしたのをちゃんと聞いた」

「馬鹿に馬鹿と言つて、なぜ悪い？」

「彼女のどこが、馬鹿だというんだ」

トラフグが叫んだ。しめた、とわたしは内心ほくそ笑んだ。単純馬鹿が、若い女を前にして、いい気になっている。かっこうの餌食だ。隙だらけだ。

「よし、教えてやる。仕事中に泣くやつは、りこうか？」

「そんなのは、りこうとか馬鹿とかとは関係な——」

「金をもらってるんだぞ。それも善良な市民の税金だ。それなのに善良な市民を前に泣くのが、りこうだというのか？ えっ？」

「それは、おまえが先に、彼女を『おい』呼ばわりしたから——」

「いつ、この女を『おい』呼ばわりした」

「したわよ、さつきいい」

女が泣きながら叫んだ。と、思わぬところから助っ人が出た。

「あたしも、聞いたわよ。この人、たしかに『おい』って言ったわよ」

七十歳近い、見るからに地味なばあが割り込んできた。トラフグの唇が、それ見ろとばかりに綻んだ。だがばあはあはやめなかった。

「でも、その女の人のことを『おい』呼ばわりしたんじゃないのよ。あたしは全部聞いたのよ。この人『父親の弟に生まれた男の子は、わたしから見れば何だ？』って質問したのよ」

わたしは改めてばあを見た。地味で質素だが、どうやら政治的な活動をしているらしい。貧弱な身体に〈市民の血税を無駄遣いするな〉と下手くそな字で書かれたタスキをかけていた。

「その通りです。ありがとうございます」

「ばあに笑顔で言ってるから、どんでん返しに舞台のように顔から態度から一変して、トラフグを睨み、

「わかるか？」

と詰め寄る。

「わかるかって……」

「父親の弟に生まれた男の子だぞ。そんなこともわからないのか」

「それは、甥……」

「それみる、おい、だ」

わたしは泣く女を指さして叫んだ。女ははっと顔を上げた。化粧が取れて、パンダ顔になっていた。おかしかったが、笑わず、

「両親が我が子を甥と言うわけがないだろ。それをこの女は感情的になって、善良な市民を悪者に仕立てようとした。これを馬鹿者と言わずして何と言おう」

「馬鹿者よ。あの女は馬鹿者よ」

「ばあが叫んだ。わたしはさらに、はやし立てる。」

「そのうえ、このやくざが、善良な市民を脅したんだ」

「ええ、見たわ。やくざよ、そのトラフグみたいなデブは」

わたしは顔を押しえた。ばばあにもトラフグに見えたのが、おかしかったのだ。わたしがうつむいている間にも、ばばあはますますヒートアップする。

「謝れ、馬鹿女。謝れ、フグやくざ。善良な市民の血税でぬくぬく太りやがって」

「あの……」

背後から声があった。見るとさっきの禿だった。禿の後ろにはワイシャツの袖をまくった若い男が居た。

「お、彼が担当か？」

「ええ。しかし……」

禿は受付嬢と警備員に食ってかかるばばあを見た。

「いい、ほおっておけ」

わたしは若い男に近づき、

「ここじゃうるさいから」

と、そこから立ち去った。角を曲がり、ばばあが見えない場所で立ち止まり、訊ねた。

「で？」

「は？」

「砂川の爺のことだ」

「ああ、それですが……」

若い男によると。税金もちゃんとおさめているし、隣近所とトラブルを起こしたという話もないので、問題はないと言う。

「歳はどうなんだ？」

「しかし、長生きしたから罪になるわけではありませんし」

「いったい幾つなんだ？」

「それは個人情報に関わることですから」

「それなら二百にも三百にもなる人間を放置しておいて良いのか」

「三百だなんて。せいぜい百五十近いだけで……」

「そんな長生きの人間がいるのか」

「しかし現に砂川さんが……」

「それなら表彰しろ。ギネスに登録しろ」

「ギネスはともかく、表彰なりは打診したことがあるようですが、いっさい断るとのことです」

「うむ」

わたしは腕組みした。では打つ手はないということか。

「しかしさ」

わたしは態度を豹変させた。フレンドリーに微笑みながら、

「わたしは井之妖彦と言います。小説を書いています。砂川さんの隣に住んでるんですが、どうです、もしあなたの隣にあんな人が住んでいたら？」

「そう言われると……」

「ねっ。わかるでしょ。気になるって」

「ええ、たしかに……」

ここだと思い、情報を引きだそうとしたが、相手は若いだけに、情が薄いのか、
「せっかくですが、個人情報保護法がありますから、これ以上は」

とわたしを突っぱねた。

わたしは折れた。笑顔で、若い男の肩を叩き、礼を言って、そこを後にした。これ以上、無用な敵を作るのはまずいと考えたからだった。

役所のロビーに戻ると、相変わらずばあが騒いでいた。トラフグだけでなく、ほかの者数人に囲まれ、どこかへ連れ去られていくところだった。

「また、あの人よ」

背後から声がしたので、振り向くと、デブのばあが金歯を剥き出しにして、隣に立つ野次馬に言った。わたしは金歯に近づき、

「知ってるんですか？」
と訊ねた。

「年中、市役所や県庁において『反対反対』って、訳のわからないことを叫んでるの。〇〇〇よ」

「ほほう、〇〇〇ですか」

わたしは肯きながら、市役所を後にした。爺のことは解明できなかったが、家路をたどるわたしの足は軽かった。人間、どんなことでもガス抜きができると、楽になるものである。

さらにスキップこそしなかったものの、ハミングしながら、わたしは考えた。案外、爺はわたしにとつて、得難い味方かもしれない。あの爺を盾に、今度は県庁へ乗り込もう。若い女、気弱そうな男を選んで、難癖をつけてやる。

警察はパスだ。いくら若い女でも、気が弱そうな男だつたとしても、わたしは警察に敬意を払っている。なぜかといえば、長くなるので一言だけ言うと、シーズンの変わり目の特番、二十四時間警察密着といったドキュメントを見れば、

「ああ、ほんとうにご苦労様」

頭を下げたくなるからである。

「そうだ、あのばばあに、爺のことを探らせよう」

思いつきが口から出た。名案だと思つた。いったい、どういふことになるか……。

◇ ◇

斯くして三日前、あの反対ばあを騙して、爺の家に送り込んだ。

どうなるか、わくわくしながら、二階の部屋の窓から様子をうかがつた。だが、拍子抜けするほど、何事も起こらない。

しかも、ばばあが出てこない。日が暮れても出てこない。次の日も早朝から見張つたが、同じだつた。わたしが眠つた深夜にこつそり帰つたのか。いや、それは考えづらい。となると、爺に絞め殺されでもしたか。

わたしは意を決して、爺の家に乗り込んだ。もし殺人なり、拉致なりしていたのなら、一大事である。ところが……。

玄関先で声をかけても反応がない。玄関戸を開けようにも鍵がかかつている。

仕方なく雑草に覆われた庭に忍び込む。すぐにできの悪い草笛を吹くような音が聞こえてきた。耳を済まさなければ、わからないくらい幽かだが、家の中から聞こえてくる。

風が吹き抜けるとき、ぼろ屋のどこかが鳴るのだろうか。それにしてもわたしの神経を妙に刺激する音だった。たまらずどこか家の中を覗ける場所はないかと、雑草をかき分けかき分け、庭を探索した。

ぼろ屋の割りに、ガードは嚴重だ。ところが締め切った雨戸を見ると、節穴がある。ワインのコルク栓が詰めてあった。

指先に力を込めて、コルク栓をねじり、引き抜くことに成功した。と、その節穴から、あの粗悪な草笛のような音が漏れてくる。

生唾を飲み、節穴から中を覗いた。驚いた。蠟燭で照らされた暗い室内、爺とばあが素っ裸でセックスしていた。

(了)